

テサロニケ人への手紙第一3章8節 「主にあって堅く立つ」

1A 信じた者への励まし

2A 霊の戦い

3A 主の来臨の備え

本文

テサロニケ人への手紙第一 3 章を開いてください、私たちの聖書通読の学びはテサロニケ第一 2 章まで来ました。午後に 3 章を一節ずつ見ていきます。今朝は 8 節に注目したいと思います。「**あなたがたが主にあって堅く立っているなら、私たちの心は生き返るからです。**」

パウロが、一つの強い思い入れをもって、この手紙を書いています。パウロ、またシラスとテモテは、意図せずにテサロニケの町を離れなければならなりました。騒動が起こったので、出て行かざるを得なかったのです。しかし、パウロは、自分に任された務めの全てを果たすことができずに出て行かなければいけなかったことに、とても気になっていました。信仰に至ったテサロニケ人たちが、激しい迫害と困難の中で置き去りにされたようになっていました。それで、パウロは何度となく、テサロニケに行こうとしていましたが、サタンが妨げました。それで、パウロは自分たちには大きな犠牲ですが、テモテをアテネからテサロニケに遣わしたのです。それで、テモテからの報告はものすごいものでした。彼らの信仰と愛についての良い知らせをもたらしてくれたのです。

それで、パウロは生き返りました。大きな安堵を得ました。テサロニケ人たちが、信仰と愛の中にいさえすれば、私たちは生きていますとまでいったのです。ここの「**生き返る**」は、直訳は「生きる」です。すでに彼らがみことばを受け入れていた時から、困難がありました。けれども、聖霊の喜びが与えられていました。物理的な危害を受けていたかもしれません。以前、パキスタン人の兄弟から聞きましたが、パキスタンの教会には入口に、金属探知機があるそうです。自爆テロを礼拝中に行う人がいるからですね。けれども、それでも例えば復活祭礼拝の時は、人で教会がいっぱいになるそうです。また、テサロニケの人たちは、かなり経済的に困窮していました。迫害を受けて仕事につけなくなっていたと思われます。それでも、困難の中で聖霊による喜びをもってみことばを聞いていました。パウロは彼らのことを案じていましたが、自分たちが離れていても、しっかりと主にあって堅く立っていたのです。そのことを知って、パウロたちは深い安堵を得ました。

今朝は、この「**主にあって堅く立つ**」について見ていきたいと思います。

1A 信じた者への励まし

主イエスに対する信仰を持つということと、その信仰に留まるということはまた別のことです。信

じたら、その信じているところに留まっているように、使徒たちは励ましていました。例えば、初めて異邦人主体の教会が、アンティオキアに生まれようとしていた時です。シリアのアンティオキアで、ギリシア語を話すユダヤ人たちが、そこにいる人々に福音を語ると、大勢の人が信じて主に立ち返りました。エルサレムからバルナバがやって来て、神の恵みを見て喜びました。私もいつも喜びます。想像さえできなかった人が、本当に救われるのを見る時に、本当にうれしくなります。そしてバルナバは、こう励ますのです。「使徒 12:23 そして、心を堅く保っていつも主にとどまっているようにと、皆を励ました。」

そして、パウロとバルナバが宣教旅行をした時に、ピシディアのアンティオキア、イコニオン、リステラ、デルベへと福音を伝えました。どこにいても、罵りを受け、時には命の危険がありました。リステラにおいては、パウロは石打にされて死んだようになってしまいました。パウロたちは引き返して、リステラ、イコニオン、アンティオキアに動きましたが、その時に、「使徒 14:22 弟子たちの心を強め、信仰にしっかりとどまるように勧めて、「私たちは、神の国に入るために、多くの苦しみを経なければならぬ」と語った。」とあります。このように、主イエスを信じた人々に対して、その信仰にしっかりと留まるようにという勧めもいっしょにあった、ということです。

私たちは、イエスを口で告白したということで喜びますが、喜んでいただけでは決していけないのです。その後で、その信仰に留まるように勧めないといけません。イエス様が、何度となく「留まる」という言葉を使って、このことを強調しておられました。イエス様がお語りになっている時に、「多くの者がイエスを信じた。」とあります(ヨハネ 6:30)。けれども、こう言われるのです。「8:31 イエスは、ご自分を信じたユダヤ人たちに言われた。「あなたがたは、わたしのことばにとどまるなら、本当にわたしの弟子です。」」イエス様のことばに、留まることをしっかりと教えています。そして事実、この信じたはずのユダヤ人は、イエス様と口論になって、なんと石打ちにしようとしてしまします(8:59)。信じたといっても、その心はまだ頑なだったのです。

イエス様はそこで、ご自分のみことばと、人々の心の関係を、種蒔きの喩えで語られました。道ばたに落ちた種については、悪魔がそれをすぐに人の心からみことばを摘み取るということで、明らかです。問題は、みことばを受け入れたと言っている人々でも、そうとは限らない人々です。良い地に落ちずに、岩地に落ちる種もあります。「マル 4:16-17 岩地に蒔かれたものとは、こういう人たちのことです。みことばを聞くと、すぐに喜んで受け入れますが、自分の中に根がなく、しばらく続くだけです。後で、みことばのために困難や迫害が起こると、すぐにつまずいてしまいます。」みことばを受け入れたことは受け入れたのですが、心が未だに岩のように固いのです。そういう人は、ちょうど映画を見て感動した時の反応のように、感情的に受け入れています。けれども、それまでのことです。信じて、それでそこに留まる時には、心が砕かれている必要があります。十字架のキリストを仰ぎ見て、罪なき方、神の子であるキリストが自分の罪のために死なれたのだというところにまで、心が砕かれている必要があります。けれども、そこまで行っていない人は、心が頑ななま

まなので、その信仰が自分に都合が悪くなると、すぐになかったことのようにしてしまいます。

そして、茨が生えている土に落ちた種については、イエス様はこう言われました。「マル 4:18-19 もう一つの、茨の中に蒔かれたものとは、こういう人たちのことです。みことばを聞いたのに、この世の思い煩いや、富の惑わし、そのほかいろいろな欲望が入り込んでみことばをふさぐので、実を結ぶことができません。」この人は、みことばはしっかり受け入れました。けれども、信仰を育てようとしている中で、世の思い煩いがでできます。まっすぐに、みことばを受け入れて信じて行こうとするならば、自分の生活に支障が出ます。また、自分の行っていることが主を喜ばせていないことに気づきます。それで、心が二つに分かれてしまうのです。一方では主に従っていきたい。けれども、もう一方では、自分のしたいことをしていきたい。どちらかを手放さないといけないのに、いつまでも手放さないで、キリストを信じていることによる実が結ばれません。

そこでイエス様は、しばしば「憎む」という言葉を使っておられます。「ルカ 14:26-27 わたしのもとに来て、自分の父、母、妻、子、兄弟、姉妹、さらに自分のいのちまでも憎まないなら、わたしの弟子になることはできません。自分の十字架を負ってわたしについて来ない者は、わたしの弟子になることはできません。」この「憎む」とは、人を嫌うような憎しみでは全くありません。自分にとって、非常に大事にしていること、愛していることがあります。それ自体は罪でも何でもありません。むしろ、父や母とイエス様は言われていますが、父と母を敬いなさいと主は命じておられます。けれども、主イエスを主とする時に、そのつながりが妨げになることがあります。その時は、主のことばを選び取るのです。その時に、強い意志が必要で、「それでも、私はイエスに従います」という決断が必要で、「憎む」という言葉が使われるのです。

こういったことが、「主にあって堅く立つ」という言葉の中にある意味です。

2A 霊の戦い

そして、主にあって堅く立つということは、「猛烈な戦いがあっても、それでも決して後ずさりしない」という意味合いで使われています。パウロは、自分がテサロニケ人から引き離されることによって、サタンのことを意識しています。「2:18 それで私たちは、あなたがたのところに行こうとしました。私パウロは何度も行こうとしました。しかし、サタンが私たちを妨げたのです。」そして、3章5節には、「それは、誘惑する者があなたがたを誘惑して、私たちの労苦が無駄にならないようにするためでした。」と言っています。主のことばを受け入れた者たちに対して、サタンが猛烈にそれに反対するということを、パウロは霊の戦いにおいて、かなり意識しています。

エペソ人への手紙 6章で、パウロは牢で鎖につながれているのですが、その鎖につないでいるローマ兵を見ながら、こう語りました。「6:10-13 終わりに言います。主にあって、その大能の力によって強められなさい。悪魔の策略に対して堅く立つことができるように、神のすべての武具を身

に着けなさい。私たちの格闘は血肉に対するものではなく、支配、力、この暗闇の世界の支配者たち、また天上にいるもろもろの悪霊に対するものです。ですから、邪悪な日に際して対抗できるように、また、一切を成し遂げて堅く立つことができるように、神のすべての武具を取りなさい。」

パウロは、コリントの人たちに「1コリ 16:13 目を覚ましていなさい。堅く信仰に立ちなさい。雄々しく、強くありなさい。」と戒めています。コリントの人たちは、いろいろなことでパウロに難癖をつけていました。大したことの無いことで、いろいろ文句を言っていました。そうしているうちに、コリントの教会に忍び込んでいる偽使徒たちの餌食にまんまとひっかかっていったのです。そのことについて、パウロは、敵前逃亡している兵士たちのように、敵を目の前にしてまんまと背中を見せている者たちと同じようにみなして、彼らを鼓舞しているのです。堅く信仰にたちなさい、雄々しく、強くありなさい。つまり、男らしくしろ！と言っているのです。

堅く立っていることについて、聖書でとても良い例があります。それは、ダビデの三勇士の一人、シャンマという人です。あまり聞きなれない名前ですが、これをよい機会にシャンマが何をしたかを覚えてみましょう。サムエル記第二 23 章 11-12 節を読みます、「彼の次はアラル人アゲの子シャンマ。ペリシテ人が隊をなして集まったとき、そこにはレンズ豆が豊かに実った一つの畑があった。兵はペリシテ人の前から逃げたが、彼はその畑の真ん中に踏みとどまってこれを守り、ペリシテ人を討った。【主】は大勝利をもたらされた。」レンズ豆の畑の真ん中で、踏みとどまりました。そして、主がペリシテ人の大勝利をもたらされました。他のイスラエルの兵は、ペリシテ人の一隊を恐れて、一目散に逃げたのです。ところが、彼は戦線を固持しました。引き下がらなかったのです。敵に對峙したのです。そして、主ご自身が大勝利をもたらされます。

私たちはしばしば、主の働きを自分自身で行わないといけないと思います。そうやって、自分を欺きます。自分には到底無理だからといって、主にあって堅く立つのをやめてしまうのです。主が求めておられるのは、ただ、しっかりと主にあって堅く立つことです。そうすれば、主ご自身が、敵の数がどんなに多かろうと、戦ってくださるのです。私たちに必要なのは、自分たちが何をするかではなく、主を信じていることなのです。その信じているところに堅く立つことです。パウロは、エペソで牧会するテモテを励ましました。「1テモ 6:12 信仰の戦いを立派に戦い、永遠のいのちを獲得しなさい。」主を信じる者は、永遠のいのちを持っています。けれども、永遠のいのちの恵みが豊かに与えられる御国に入るまでは、この信仰の戦いを立派に戦うのです。

3A 主の来臨の備え

そして、主にあって堅く立つということの中には、「主が再び来られるのを、しっかりと待つ。」という意味合いがあります。主が来られる前に、多くの誘惑と困難があります。それに人々が妥協してしまいます。その妥協している教会、また背を向けてしまっている教会、また霊的に死んでしまった教会があることを、イエス様は、黙示録で語っておられます。それぞれに、「悔い改めなさい」と

呼びかけておられます。もし悔い改めなければ、神の家とて裁きがあることをはっきりと教えておられます。主が戻って来られても、それでも自分が信仰のうちに立っているのか？という吟味が必要だということです。

妥協している教会や、背教の教会の中にあっても、それでも勝利を得る者たちがいることを、イエス様は教えておられます。例えば、ティアティラの教会に対してはこう語られます。「黙 2:24-26 しかし、ティアティラにいる残りの者たち、この教えを受け入れず、いわゆる「サタンの深み」を知らないあなたがたに言う。わたしはあなたがたに、ほかの重荷を負わせない。ただ、あなたがたが持っているものを、わたしが行くまで、しっかり保ちなさい。勝利を得る者、最後までわたしのわざを守る者には、諸国の民を支配する権威を与える。」あなたがたが持っているものを、イエス様が来られるまで、しっかり保ちなさいと言われていました。それ以上の重荷は負わせないと言われていました。主は、ご自身が戻られるにあたって、何か大きなことを私たちに期待しておられません。むしろ、すでに信じている福音をしっかりと保っていなさいと命じられます。もうすでに知っていることを、心を奮い立たせてしっかりと保っていなさいと言われていたのです。パウロも、こう言っています。「Ⅱテモ 1:14 自分に委ねられた良いものを、私たちのうちに宿る聖霊によって守りなさい。」

イエス様は、ご自身が戻って来られる時に、果たして信仰が見られるのだろうか？と懸念しておられる言葉を語られています。「ルカ 18:8 あなたがたに言いますが、神は彼らのため、速やかにさばきを行ってくださいます。だが、人の子が来るとき、果たして地上に信仰が見られるでしょうか。」主がせっかく、聖徒の訴えを聞いて下さり、すみやかにさばきを下さるのに、待てなくなり、あきらめてしまって、信仰をもっていないということが起こってしまうことを警告しています。

なぜ、そうになってしまうのでしょうか？一つに、疲れ果ててしまうからです。「ヘブル 12:3 あなたがたは、罪人たちの、ご自分に対するこのような反抗を耐え忍ばれた方のことを考えなさい。あなたがたの心が元気を失い、疲れ果ててしまわないようにするためです。」自分の内にある罪、また外からやって来る、罪人による反対。いろいろな困難があります。しかし、それらの反抗に耐え忍ばれたイエス様から目を離して、疲れ果ててしまうのです。けれども、それらは主の訓練なのだ、とヘブル書の著者は言います。愛する者を訓練しているのだと言われます。だから、ちょうどリハビリの理学療法士のように、こう励ましています。「12:13 ですから、弱った手と衰えた膝をまっすぐにしなさい。」自分が弱くなって、つまずいてしまっている、あるいは、つまずきそうになっている時に、そのまま主にあって立ち上がればよいのだと言っています。そうすることが、癒されるのだと言っています。足が弱まっている時に立ちあがったら痛いですね。でもその痛みがあつてこそ、癒されるのです。キリストにある成熟に向かうには、必要なことです。

私たちに与えられた希望は、決して失望に終わらないとパウロは言います。「ロマ 5:2-5 このキリストによって私たちは、信仰によって、今立っているこの恵みに導き入れられました。そして、神

の栄光にあずかる望みを喜んでいますが。それだけではなく、苦難さえも喜んでいますが。それは、苦難が忍耐を生み出し、忍耐が練られた品性を生み出し、練られた品性が希望を生み出すと、私たちは知っているからです。この希望は失望に終わることがありません。なぜなら、私たちに与えられた聖霊によって、神の愛が私たちの心に注がれているからです。」

興味深いことに、希望を抱いた私たちはさらに、苦難を経ることによって、より深い希望へと変えられていきます。初めに、栄光にあずかる望みがあります。主に会って、そのすばらしさ、主が戻って来られる望みを、大いに喜びます。私も、イエス様によって救われて、この方が戻って来られる望みが与えられて、大いに喜びました。ところが、主が戻られる前に、いろいろな試練を受けます。落ち込みますね、気がめいりますね。けれども、パウロは、それでも喜ぶことを語っています。なぜかという、その苦難でさえが、主に対する希望がさらに深められるからです。まず、忍耐が生まれますね。忍耐を働かせると、品性が生み出されます。主の忍耐を深く知ることができるようになり、キリストの似姿に変えられていきます。そうすると、自分の望みは、ただキリストだけになります。この方のみ希望を見出す、他の何物でもなく、主との交わりの中に悦びがあるのだ、ということを知るからです。主こそが希望であるのですが、品性が練られているからこそ、その交わりを楽しむことができます。そういったことなので、失望に終わらないのです。神の愛が、聖霊によって注がれるのです。

主にあって堅く立つということだけが、いわば命綱なのだ、ということです。主にこそ力があり、知恵があり、愛があり、いのちがあります。この方に望みを置いていさえすれば、残りは主が行ってくださるのです。だから、パウロにとっては生きがいなのです。彼らが主に堅く立ってさえいれば、生きているのです。みなさんも、ただその信仰にしっかり立ちましょう。